歌時計

童謡集

水谷まさる

青空文庫

序

この小さな童謡集を「歌時計」と名づけたのは、べつに深い意味はない。

わたくしはただ、驚異のねぢを巻いて、そのほどけるがままに、澄み切つた歌をうたひたいと思ふから、あへてかういふ名をつけたのであるが、赤や紫や青の、夢のきれはしを投げつけて、少年のわたしの心をさざなみ立たせたところの、あの「歌時計」の歌のやうな、それほどの魅力がわたしの童謡にあるかないか。

だが、そんな反省にくすぶると、この小さな童謡集に、小さいながらにも、この両三年間の選集であるだけに、わたしの眉はくもらざるを得ないが、とにかく、歌時計のねぢは健全なる自製であるから、その快よき理由で、自分だけとしては、眉のくもりは追ひ拂ふことにしよう。

なほ、この童謡集のために、いろいろお世話していただいた大島庸夫君に感謝したい。

昭和四年四月

著者

目次

小鳥
風と繪本
露の小人
ジヤム地獄
トランプちやん
桃太郎
ポケツト
すみれとてふてふ
つかまへたいな
熊
さくらの花道
春の山
あがり目さがり目
だだつ子
柳と松
りんごの皮むき
春が來た
野の花
白い齒
葉山の海
おもひで話
白いお手
風と月
あがり双六
雲の羊
口わる烏
野原と小川
足柄山
ふしぎな人形
自動車
五つの色
ねむり姫
押しくらまんぢゆう
さくらと雀
白いマント
いい毛布
お菓子
手紙
巨きな百合
芒と月
青いかげ
秋風
ほんとにしないけど
おとぎばなし
雪
月
花
とんてんかん

岐阜提灯
おるすばん
泥の鳩
白い百合
父さんのマント

歌時計

――今のわたしにとつて、子供は
小さいフェーヤリである。――

小鳥

あかるい日ざし
小枝(こえだ)のなかの
小鳥(ことり)のかげが
障子にうつる
ちらちらうつる。

障子を開(あ)けりや
びつくりしたか
小鳥は飛(と)んで
小枝がゆれる
こまかくゆれる。

あかるい日(ひ)ざし
小鳥は逃げて
姿(すがた)を見(み)せぬ
見せぬがうたふ
どこかでうたふ。

風と繪本

だあれもゐない
あたしの部屋(へや)で
風がぱたぱた
繪本をめくる

おいしいお菓子の
繪のあるページ
風はしばらく
見とれてゐたよ。

きつと小(ちひ)ちやい
子供の風だ
遊(あそ)ばうと思つたら
すぐ逃(に)げちやつた。

露の小人

白百合　白百合
花のなかに
露の小人が
五六人。

おねども白い
まくらも白い
みんなぐつすり
ねむつてた。

白百合　白百合
風が來て
ゆすぶりや露の
小人たち。

お目々さまして
あくびして
ころころころと
ころげ出(で)た。

ジヤム地獄

落ちた落ちたよ
小さな蠅が
赤いあんずの
ジヤム地獄。

出よう飛ばうと
あせつたけれど
羽根や手足(てあし)が
ねばつくばかり。

泣いた泣いたよ
小さな蠅は
助けておくれと
聲はりあげて。

けれどぼくなら
もし落(お)ちたつて
落ちてうれしい
ジヤム地獄。

トランプちやん

かはいい
あかちやん
トランプちやん。

あかちやん
お口(くち)は
ダイヤの一。
お顔(かほ)のなかで
たつた一つ
赤い。

かはいい
あかちやん
トランプちやん。

あかちやん
ひとみは
クラブの二。
お顔のなかで
ならんで
黒い。

桃太郎

桃から桃太郎
生(うま)れたとさ
桃太郎生れる
桃はないか。

たくさん桃買(か)つて
さがさうか
いくつも桃割(わ)つて
さがさうか。

それとも川へ
行(い)こかしら
桃がながれて
來るかしら

もしも桃から
もうひとり
桃太郎生れりや
うれしいな。

ポケツト

ぼくの上着(うはぎ)にや
ポケツトが
二つあるけど
つまんない。

だつてお菓子(くわし)と
ゴムまりと
ピストル入れりや
いつぱいだ。

手帳(てちやう)や獨樂(こま)や
ほそびきや
ぼくにや入れたい
ものばかり。

大きなポケツト
四(よつ)つある
父(とう)さんの上着は
すてきだな。

すみれとてふてふ

かすみのこめた
ゆふまぐれ
小山のかげの
話しごゑ。

——とめて下さい。
すみれさん
けふはほんとに
つかれたわ。

——どうぞおとまり
てふてふさん
あたしのとこで
よかつたら。

なんてやさしい
話しごゑ
のぞいて見れば
てふてふは

小(ちひ)さいすみれの
花のかげ

とんとんとろりと
もうねてた。

つかまへたいな

つかまへたいな
まつ白い雲(くも)を
お空でをどる
まつ白い雲を。

つかまへたいな
小(ちひ)ちやな風を
葉(は)つぱをゆする
小ちやな風を。

つかまへたいな
かはいい聲を
あかちやんの笑ふ
かはいい聲を。

熊

のつそり　のつそり
檻(をり)のなか
行(い)つたり來(き)たり
黒い熊(くま)。

暑(あつ)さも暑(あつ)いし
日は長(なが)い
朝からあくびは
十六ぺん。

しかたがなしに
首(くび)ふつて
のつそり　のつそり
黒い熊。

さくらの花道

さくらの花道（はなみち）
花のかげ
白いほんぼり
灯（ひ）がとぼる。

とぼりやほんのり
夢のいろ
さくらの花が
うすあかい。

もしも雪駄（せった）で
稚子髷（ちごまげ）で
ゆらり袂（たもと）で
通（とほ）つたら

さくらの花道
花のかげ
むかしの夢が
見れるだろ。

春の山

霞の蒲團に
くるまつて
ぬくぬくお晝寢(ひるね)
春の山。

そよ風そより
吹いてるに
まだまだお肩(かた)が
まるござる。

霞の蒲團は
ふうわふわ
いつまでお晝寢
春の山。

鳶(とんび)がとろり
啼(な)いてるに
まだまだお背(せな)も
まるござる。

あがり目さがり目

――むかしの遊戯唄につけ足して
今の子供たちにおくる――

あがり目（め）　さがり目（め）。
ぐるつとまはつて猫（ねえこ）の目。

あがり目はおこり目
あがり目をしたらば
おこりたくなあつた。

さがり目はわらひ目
さがり目をしたらば
わらひたくなあつた。

猫（ねえこ）の目は猫（ねえこ）の目。
猫の目をしたらば
ねずみが見えた。

あがり目　さがり目
ぐるつとまはつて猫の目。

だだつ子

だだつ子こねた
だだこねた
靴屋の店で
だだこねた。

これもいやだよ
あれもいや
顔をしかめて
だだこねた。

そんならどれが
買(か)ひたいの？
やさしくかあさん
きいたけど

だだつ子こねた
だだこねた
頭(あたま)ふりふり
だだこねた。

柳と松

そらそらお庭を
見てごらん
柳はやさしい
おぢやうさん
松はがうじやう
おぼつちやん。

遊びませうと
風が來て
あんなに誘(さそ)つて
ゐるけれど
松はだまつて
知らぬ顏。

風ともつれて
遊ぶのは
しなしな青い
ふり袖(そで)の
やさしい柳の
おぢやうさん。

りんごの皮むき

さあさりんごの
皮むきだ
きれずに長く
つながつて
するするむけば
いいんだよ。

お人形さんの
帯のように
腕の時計の
紐のように
ちやんときれいに
むくんだよ。

さあさりんごの
皮むきだ
銀のナイフは
よく切れる
手を氣をつけて
むくんだよ。

春が來た

そよそよ春風(はるかぜ)
吹いて來て
やさしい聲で
いひました。

「かはいいつぼみよ
みなお起(お)き
起きなきやそうれ
くすぐるよ！」

そこでつぼみは
目をさまし
花を咲かして
いひました。

「おやもう春が
來(き)てたのか
あたり近所(きんじょ)が
まぶしいな！」

野の花

つくしんぼうは
お坊さん
おつむはいつも
くうるくる。

たんたんたんぽぽ
兵隊さん
かぶつた帽子にや
金かざり。

かはいい小娘
れんげさう
あかい花櫛
ちいらちら。

それぢやすみれは
なんだろな
むさらき頭巾の
お尼さん。

白い歯

櫻(さくら)のつぼみが
まだ小(ちい)さい。
坊(ぼう)やの歯(は)ぐきは
まだかたい。

櫻のつぼみが
ふくらんだ
坊やの歯ぐきも
ふくらんだ。

櫻のつぼみが
色(いろ)づいた。
坊やの歯ぐきも
色づいた。

櫻のつぼみが
ひいらいた。
坊やの白い歯
そら生えた。

葉山の海

葉山の海は
青(あを)かつたよう
波(なみ)がさびしく
寄(よ)せてたよう。

御用邸(ごようてい)にや松(まつ)が
ならんでたよう
枝(えだ)をさびしく
まげてたよう。

だつて天子(てんし)さま
おわづらひだよう
長(なが)くふせつて
おいでだよう。

ぼくはさびしく
おがんだよう
おいのりささげて
來(き)たんだよう。

おもひで話

ゆうべのことだ
ストーブのなかで
ぼくだけ聞(き)いた。

むかしのむかし
土(つち)ンなかにゐた時の
石炭たちの
おもひで話

くすくす笑(わら)つて
まつ赤(か)になつて
石炭たちの
おもひで話。

ゆうべのことだ
ストーブのなかで
ぼくだけ聞いた。

白いお手

ひとりぼつちでゐる時に
ぼくはいつでも思ひだす
それはきれいなねえさんの
ほんとにやさしい白いお手

「おりこうさんね」といひながら
ぼくの頭をなでたお手

いつのことやら忘れたが
どこのだれやら忘れたが

ぼくはいつでも思ひだす
そしてなぜだか涙ぐむ。

風と月

子供よ　子供よ
どこへ行く？
はりがね持って
どこへ行く？

風をしばりに
行くんだよ
だってかあさん
ご病気で
風が吹くのが
さみしいの。

子供よ　子供よ
どこへ行く？
ふろしき持って
どこへ行く？

月をつつみに
行くんだよ
だってかあさんは
ご病気で
月が照るのが
かなしいの。

あがり双六

あがり双六（すごろく）
東海道
五十三次
長道中（ながどうちゅう）。

振つた賽（さい）ころ
ころがして
目數（めかず）かぞへて
急（いそ）ぎやんせ。

泊りかさねて
おくれると
連（つ）れは追ひ越す
先へ行く。

わけて箱根と
大井川
たんと氣をつけ
通りやんせ。

さても御無事（ごぶじ）で
長道中

あがりや西京
花ざかり。

花を見ながら
御褒美（ごほうび）の
お菓子たくさん
食（た）べしやんせ。

雲の羊

ふはりふはりと
空をゆく
雲の羊に
乗りたいな。

空の牧場を
ひとめぐり
乗つてまはれば
たのしかろ。

ちりんちりんと
鳴る鈴は
羊のくびに
ないけれど、

かはりにぼくが
口笛を
じやうずに吹いて
ひびかせる。

思ふだけでも
うれしいな

雲の羊に
乗りたいな。

口わる烏

いつも學校の
ひけどきに
口わる烏(からす)が
やつて來る。

今日もあたいが
算術で
乙をとつたら
知つてゐて、

屋根にとまつて
下向(したむ)いて
大きな口で
ガアと啼(な)いた。

石をほうつて
やりたいが
甲でなかつた
はづかしさ。

今度はきつと
甲とらう

口わる烏が
笑ふから。

野原と小川

丘にのぼつて
眺めたら
まるで姉さんの
お羽織を
ひろげたやうな
野原です。

赤や黄色に
咲く花は
青地に染めた
飛模様（とびもやう）
のどかなのどかな
五月です。

丘にのぼつて
眺めたら
まるで母さんの
丸帯を
ほどいたやうな
小川です。

水のおもての
かがやきは
浮き織（う）りにした
銀の糸
のどかなのどかな
五月です。

足柄山

足柄山(あしがらやま)の
かすみは深い
山道すつかり
かくれてしもた。

金太郎さんは
困ってしもた
仕方がないから
おういと呼んだ
まつかな顔(かほ)して
おういと呼んだ。

するとのつそり
熊が顔出した
金太郎さんは
おどろいてしもた
なんだそんなに
近くにゐたか

足柄山の
かすみは深い
山道すつかり
かくれてしもた。

ふしぎな人形

銀のお月さま
かたいかな
かたくないなら
小刀(こがたな)で
ぼくは人形が
きざみたい。

できたら星を
目にはめて
夕日の紅(べに)を
口(くち)にさし
雲をちぎつて
髪にする。

とてもふしぎな
人形だ
きつとみんなは
ほしがるが
ぼくはだいじに
しまつとく。

自動車

花の小徑(こみち)を
走るのは
おもちやの赤い
自動車よ。

小徑のみぎと
ひだりには
きれいに咲いた
春の花。

みんな笑つて
うれしそに
走る自動車
見送るに、

ほんにおしやれの
ばらばかり
さも乘りたそに
のびあがる。

五つの色

今朝(けさ)のお膳(ぜん)は
きれいだな
五つの色が
ならんでる。

赤い梅ぼし
黒い海苔(のり)
焼いた玉子は
まつ黄色(きいろ)。

御飯(ごはん)は白く
味噌汁に
浮(う)いて青いは
ほうれんさう。

おとぎばなしの
王さまが
召しあがるよな
朝御飯。

ぼくはすつかり
よろこんで
五つの色に
見とれたよ。

ねむり姫

黄金(きん)のお城の
ねむり姫
ねむつたままで
かはいさう。

冬のなぎさに
あげられた
貝のふたより
まだかたく、

春待つ花の
つぼみより
まだまだかたく
ぴつちりと、

つむつたままの
二つの目
三年三月
ねてしもた。

黄金(きん)のお城の
ねむり姫

魔法をといて
あげたいな。

押しくらまんぢゆう

押しくらまんぢゆう
ぎゆう　ぎゆう　ぎゆう。

やれ押せ　それ押せ
みんな押せ
押したら寒さが
逃げてくぞ。
押しくらまんぢゆう
ぎゆう　ぎゆう　ぎゆう。

押してりやぽかぽか
あつたかい
出來たてまんぢゆう
けむが出る。

押しくらまんぢゆう
ぎゆう　ぎゆう　ぎゆう。
苦しい痛(いた)いで
飛び出すな
つぶれたまんぢゆう
しやうがない。

さくらと雀

三月さくらの
花ざかり
枝をくぐって
花のなか
ちよんちよん雀が
ちよんと飛ぶ。

飛べば小枝が
ゆすぶれて
惜しやさくらの
花びらが
ぱらぱらぱらり
散るけれど、

三月さくらの
花ざかり
花にうかれて
うれしいか
ちよんちよん雀は
ちよんと飛ぶ。

白いマント

富士山が
富士山が
白いマントを
ぬいぢやつた。おや、ぬいぢやつた。

今日見りや白い
帽子だけ
横つちよかぶりに
かぶつてた。おや、かぶつてた。

富士山の
富士山の
白いマントは
どうしたろ、おや、どうしたろ。

おてんとさんと
春風が
どつかへ隠して
知らぬ顔、おや、知らぬ顔。

いい毛布

春の野原は
いい毛布（けつと）
草はやさしく
やはらかい
ごろんと横に
ころがれば、

ほかほかぬくい
日が照つて
どうやらすこし
ねむくなる。

春の野原は
いい毛布
草はふはふは
やはらかい
ひばりのうたを
ききながら、

草のにほひを
かいでれば
うとうといつか

花のゆめ。

お菓子

わたしがもしも王子なら
家來(けらい)を呼んで云ひつけよう。

子供をみんなつれて來て
おいしいお菓子を分けてやれ。

二つのお手にのらぬほど
たくさんたくさん分けてやれ。

けれど、わたしは王子ぢやない
お菓子屋の店(みせ)の前に立ち、

今日もお菓子に見とれては
さういふことを思ふだけ。

手紙

家(うち)へ歸れば
机のうへに
そつとのつてる
手紙が一つ。

讀まぬさきから
すつかりわかる
だつて手紙は
もみぢの枯葉。

そろそろ冬に
なり候
御用意なされ
たく候。

出したお方(かた)は
神さまだらう
冬の來たのを
知らせる手紙。

巨きな百合

とても巨(おほ)きな
白い百合
なかには露が
たまつてる。

ぼくははだかに
なつちやつて
露の水風呂(みづぶろ)
つかふんだ。

花のにほひの
とけこんだ
露は身體(からだ)に
しむだらう。

ぼくは顔だけ
出したまま
ラララララと
うたふんだ。

とても巨きな
白い百合
咲いてるとこを
知らないか。

芒と月

さつさ、すすきの
白い穂は
風に吹かれて
みなうごく

さつさ、うごけば
白い手よ
おいでおいでと
みなまねく。

さつさ、まねけば
雲（くも）のかげ
月がちらりと
顔出した。

さつさ　お月さん
出した顔
にこにこわらつて
まんまるい。

青いかげ

青いね、青いね
森のなか
お顔のうへの
青いかげ
白い服にも
青いかげ。

青いね、青いね、
森のなか
心にもさす
青いかげ
心がひつそり
澄んで來る。

青いね、青いね、
森のなか
ときどきみんなで
來てみよね
なんだかふしぎな
ところだね。

秋風

この風こそは
秋風よ
さらさらさらと
さびしいよ。

山の兎は
長い耳
立ててひっそり
聞いたらう。

山の小萩（こはぎ）は
ほろほろと
花をこぼして
吹かれたらう。

この風こそは
秋風よ
山から吹いて
さびしいよ。

ほんとにしないけど

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに見たんだよ。

あの夕やけの西の空
赤くそまつた雲のうへ
肥つたはだかのかはいい子。

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに聞いたんだ。

その子が鳴らす金の鈴
遠くかすかにさはやかに
胸にしみ入るいいひびき。

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに知つてゐる。

その子はぼくを好(す)いてゐて
鈴を鳴らしてうれしそに
おいでおいでと誘ふんだ。

おとぎばなし

おとぎばなしを探(さが)さうと
町へ出かけてみたけれど
町はほんとにつまらない。

青い乗合自動車は
青いあひるのやうだけど
金の卵は生まないし

角(かど)の大きなビルデイング
お城のやうだが窓からは
さびしい王子は見てないし

いろんな人も通るけど
銀の魔法の杖をもつ
お爺さんは通らない。

やつぱり庭の芝のうへ
空を見ながらねころべば
おとぎばなしは見つかるよ。

雪

吹雪(ふぶき)の山でまた一人
死んだと出てる新聞を
見ながらぼくは思つてた。

山の獣(けもの)はそんな日に
すみかの穴にかたまつて
親子で吹雪を聞くのかな。

だけども餌(えさ)をとりに行き
死んぢやうこともありさうだ
けれど新聞にや出やしない。

月

月がほしいと
泣きながら
背の赤兒（せなのあかご）は
手をのばす。

あれは取れぬと
云ひながら
子守はやけに
脊ゆする。

だけど子守も
つい昨夜（ゆふべ）
月を見てたら
かなしくて

郷里（くに）に歸つて
行きたいと
泣いてせがんで
ゐたさうな。

花

三日の雨に
しとしと雨に
さくらの花の
うす紅色（べにいろ）は
すつかりさめた。

五日の風に
そよそよ風に
さくらの花は
あら氣の毒な
ちらちら散つた。

七日の月は
あかるい月は
さくらの花の
散りしくうへに
しらじら照つた。

とんてんかん

鍛冶屋(かぢや)の小僧(こぞう)さん
はだかんぼ
春の日永(ひなが)を
とんてんかん。

窓のさくらは
きれいだが
わき見はならぬ
とんてんかん

なにがおもてを
通らうが
よそ見はならぬ
とんてんかん

くにのかあさん
思ひ出し
淋しくなつても
とんてんかん

鍛冶屋の小僧さん
ほそ腕に
力をこめて
とんてんかん。

岐阜提灯

しんとん　とろり
岐阜提灯（ぎふちやうちん）

岐阜提灯に
灯（ひ）をつけよう
つけりや水いろ
夢のいろ
ぼんやり照らす
やはらかさ。

しんとん　とろり
岐阜提灯

岐阜提灯を
軒のした
つるしてそつと
眺めてりや
しづかな夢を
見てるやう。

おるすばん

かあさん　おるす
泣かないの
ひとりで寝ても
泣かないの。

ひとつ、ねむれば
花のゆめ
ふたつ、ねむれば
星のゆめ。

みっつ、ねむれば
もういいの
起きりやうれしい
まくらもと。

おみやがたんと
もらへるの
泣かずにるすばん
するからよ。

泥の鳩

おもちやの鳩(はと)は
泥(どろ)の鳩
羽根はあつても
飛べぬ鳩
吹かなきや鳴かぬ
笛の鳩。

おもちやの鳩は
泥の鳩
豆をやつても
食べぬ鳩
やさしくせぬと
われる鳩。

おもちやの鳩は
泥の鳩
けれどあたしの
好きな鳩
なかよくいつも
あそぶ鳩。

白い百合

草にかくれた
白い百合
花のすがたは
見えないが

あまいにほひを
たてるので
すぐにありかが
見つかつて

金(きん)の羽蟲(はむし)が
五匹づれ
かさこそ分(わ)ける
草のなか。

花に近づき
みんなして
ほめそやしたよ
白い百合。

父さんのマント

父さんのマントは
大きいな
ぼくら兄弟三人が
すっぽりかぶって
まだあまる。

父さんのマントは
大きいな
ぼくら兄弟三人が
ひろげてすはって
まだあまる。

かぶってみたり
すはったり
大きなマントは
いいおもちや
遊んでゐるまに
日が暮れた。

青空文庫情報

底本：「叢書　日本の童謡「歌時計　童謡集」」大空社
　　1996（平成8）年9月28日発行
底本の親本：「歌時計　童謡集」行人社
　　1929（昭和4）年6月1日発行
※本文「青いかげ」第三連、四行一文字目「來」と六行一文字目「と」は、底本では誤って逆に植字されています。
入力：大久保ゆう
校正：土屋隆
2006年7月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

歌時計
童謡集

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　水谷まさる
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/